

「発達」概念の生態学

— 能力観との関連から —

企画メンバー

川田学（代表）・伊藤崇・白水浩信・宮崎隆志・田岡昌大（子ども発達臨床研究センター・非常勤研究員）

企画趣旨

本企画では、「発達 development」と「能力 faculty」との概念的関係を、学際的な議論を通して、一定の整理を試みることを目的とする。「発達」は単独で特定の言説を構成するものではなく、いくつかの相互規定的な語彙・概念との組み合わせることによって、近代における人間形成の中心思想の地位を固め、その後も中心軸を変容させながら時代状況に極めて柔軟に適応してきたと考えられる。そこに、発達という知の生態学が成立しうるのではないか。

企画者たちは、子ども発達臨床研究センターを拠点として、2011 年度から発達概念の再検討の作業で行ってきたが、「発達」が文脈や領域により冗長で多様な含意をもつこともあり、貫通的な分析視角を持たず、発達の一見したところの“まぼろしの対象性”に嘆息してきた。本企画では、能力概念・能力観との関係に重心を置くことによって、概念としての発達の輪郭をより鮮明にしたいと考えている。

そこで、教育思想史、カリキュラム研究・学力論、発達心理学・特別支援教育の3領域から、精力的に研究されている若手・中堅の研究者をゲストに招いた公開研究会を以下の通り開催する。その際、様々な分野の大学院生や若手教員をコメンテーターとして依頼することにより、領域横断的で新鮮な議論が展開されることを期待している。

第1回研究会

【日時】 2017年3月9日（木） 14時～18時

【会場】 教育学部棟3階大会議室

【ゲスト】 平野 亮 氏（兵庫教育大学・講師）

【テーマ】 「能力」概念の生成史：19世紀西洋の骨相学（Phrenology）を足がかりに

【概要】 西洋における2000年に及ぶ〈心／魂の能力〉の観念史の骨頂に、19世紀のPhrenologyがある。性格や才能の原因たる脳機能を〈能力 faculty〉と呼び、発達の程度差を有する30数個の〈基本能力〉の組み合わせによって無数の〈個性〉を説明可能にしたこの学は、〈能力の束〉としての人間に対する科学的教育論を展開した。この能力教育論は、日本における近代教育思想の形成にも影響を与えたと考えられる、い

わば近代教育言説の一つの祖型なのであった。

【コメンテーター】 蒔苗詩歌（視知覚認知過程論 D1）、新藤康太（学校史 D1）

第2回研究会

【日時】 2017年3月10日（金） 10時～14時

【会場】 教育学部棟3階大会議室

【ゲスト】 石井英真氏（京都大学・准教授）

【テーマ】 コンピテンシー・ベースのカリキュラム改革の危険性と可能性：教育的価値論としての学力論からの視座

【概要】 社会の変化とそれに伴う学校に期待される役割の変化という構造変容を背景に、先進諸国において内容ベースからコンピテンシー・ベースへのカリキュラム改革が展開している。本発表では、日本の学習指導要領改訂をめぐる議論を読み解きながら、コンピテンシー・ベースのカリキュラム改革を批判的に検討しつつ、新たな学力像や授業像や学校像の創出につなげていく見通しを示す。

【コメンテーター】 及川智博（乳幼児発達論 D1）、佐竹貴明（学習・授業論 M2）

第3回研究会

【日時】 2017年3月17日（金） 14時～18時

【会場】 教育学部棟3階大会議室

【ゲスト】 赤木和重氏（神戸大学・准教授）

【テーマ】 流動的異年齢教育から考える発達

【概要】 昨年度、在外研究の機会を得て、アメリカ・ニューヨーク州シラキュースに1年間、家族とともに滞在した。そこで、幼児から中学生まで、障害のある子どももない子どもも共に学ぶ流動的異年齢教育を行っている私立学校に出会った。その学校でのフィールドワークを通して、流動的異年齢教育の意味について報告するとともに、その教育に通低している発達観についても議論する。結論から言えば、個々の「自己運動としての発達」を重視するからこそ、多様な集団が必要とされたのである。

【コメンテーター】 篠原岳司（学校経営論・准教授）、日高茂暢（作新学院大学・講師）、後藤亜矢子（学習神経心理学 M1）

付記

本企画は、JSPS 科学研究費・基盤研究（B）「異年齢期カップリングの発達学：子どもの生きづらさを超えるための学際的協働」（代表者：川田 学）との共催である。

問い合わせ先

川田 学（教育学研究院・准教授） kawata@edu.hokudai.ac.jp

※参加費は無料です。お気軽に足をお運びください。